



会 2005、愛知川町史編纂委員会 2005)、底石であるか(細川 2010)に見解が分かれる。

後者については、石棺材の出土した古墳は不明とする見解が多い(滋賀県愛智郡教育会 1929、細川 2003・2010、秦荘町史編纂委員会 2005、東近江市教育委員会埋蔵文化財センター 2011)。一方で、赤塚古墳から出土したと伝えられているという記述もみられる(愛知川町史編纂委員会 2005)。

## (2) 石棺材の概要

ここでは前年度報告(藤川ほか 2022)の石棺材に関する内容をまとめると同時に、今年度の追加調査で実施した聞き取りの成果を報告する。

石棺材①は、現在は立てられた状態で正眼寺の庭石に転用されている。縄掛突起を持つ蓋石である。

石棺材②は、石棺材①と同じく立てられた状態で庭石に転用されている。計測の結果、『近江愛智郡志』内で共同墓地に存在するとされた石棺材と法量・形状とも一致したため、共同墓地にあった石棺材②が正眼寺に移動したと考えられる。実際に、1979年(昭和54)に発行された発掘調査報告書で、共同墓地に置かれている石棺材②の写真を確認した(図2)(滋賀県教育委員会 1979)。この点について地元の方に聞き取り調査をおこなった結果、勝堂町では20～30年前まで土葬がおこなわれており、共同墓地にあった石棺材②は、葬式の際に棺を置くために使っていたという情報を得た<sup>1)</sup>。石棺材②が共同墓地から正眼寺に移動した正確な時期を明らかにすることは叶わなかったが、共同墓地において、表に「墓地区画完成記念」、裏に「平成2年12月吉日」と刻まれた碑を確認している。碑の前には、図2内で石棺材②の下に敷かれている石材が置かれていた。石棺材②の移動と、墓地区画整備の関連性が推測される。

石棺材③は、現在は瑞正寺境内の墓地の隅に横置きされている。以前は墓の敷石に転用されていた。

これら石棺材①～③は赤塚古墳から出土したとする説もあるが、正眼寺・瑞正寺と赤塚古墳は直線距離にして淵川を挟んで約700mの距離がある。両寺院のより近くには早くから石室が開口していたおから山古墳もあり(横田 1979)、石棺材の帰属古墳については検討を要する<sup>2)</sup>。(横白彩江)



図2 共同墓地内の石棺材②  
(滋賀県教育委員会 1979)

表1 3Dモデル作成時の解析設定

工程	設定
写真のアラインメント	高
高密度クラウド構築	高
メッシュ構築	高
テクスチャー構築	8192px × 3枚

### 3. 調査の成果

#### (1) 調査の方法

調査では SfM/MVS を用いた三次元計測をおこなった。使用した機材は以下の通りである。

- ・ Panasonic LUMIX DC-GX7MK3 (LEICA DG SUMMILUX 12mm F1.4 ASPH.、LUMIX G MACRO 30mm F2.8 ASPH. MEGA O.I.S.)
- ・ Canon EOS RP (RF35mm F1.8 MACRO IS STM)
- ・ OLYMPUS Tough TG-6

SfM/MVS には Agi Soft 社の Metashape Professional を使用した。3D モデル作成時の各工程の解析設定は表 1 の通りである。作成した 3D モデルは OBJ 形式で書き出し、オープンソースの Cloud Compare を使用してオルソ画像の作成をおこなった。

#### (2) 石棺材① (図 3)

縄掛突起をもつ蓋石である。一部土中に埋められているため正確な長さを把握することは難しいが、現状確認可能な部分の規模は長さ 1.72 m、幅 0.93 m、厚さ 0.22 m である。縄掛突起が長側辺に 2 つずつ、片方は土中のため確認できないが短側辺に 1 つ存在し、突起 1・2 型式に復元できる (和田 1976)。突起は方形で斜面部に付き、垂直面には達しない。突起の突出は 2.5cm ほどしかない。上部平坦面指数<sup>3)</sup> は 80 を数える。内面<sup>4)</sup> は中央部と縁辺部を残して周囲に溝を削り込み、側石と結合する工夫がなされている。内面の削り抜きはおこなわれない。石材は広義の竜山石であり、兵庫県高砂市から加古川市にかけて採石される、いわゆる宝殿石系である<sup>5)</sup>。全体的に風化が激しく、所々に蜂の巣状の風化を残す<sup>6)</sup>。工具痕を残す部分はほとんどみられない。

#### (3) 石棺材② (図 3)

一部土中に埋められているため正確な長さを把握することは難しいが、現状確認可能な部分の規模は長さ 1.43 m、幅 0.85 m、厚みは計測部分によって大きく値が変わるが、最大部分で 0.25 m である。内面は、中央部を凸状に残して周辺部分を段状に削り、側石と結合する工夫がなされている。外面は、中央部が高く周辺部が低い形状をしており、最大約 13cm 外側に膨らみ弧を描く。石材は宝殿石系である。風化が進むが一部に工具痕を残す部分がみられる。特に内面、側面と外面で加工の精粗の差が明瞭である。このことから、組合式石棺の底石と考えられる。

#### (4) 石棺材③ (図 4)

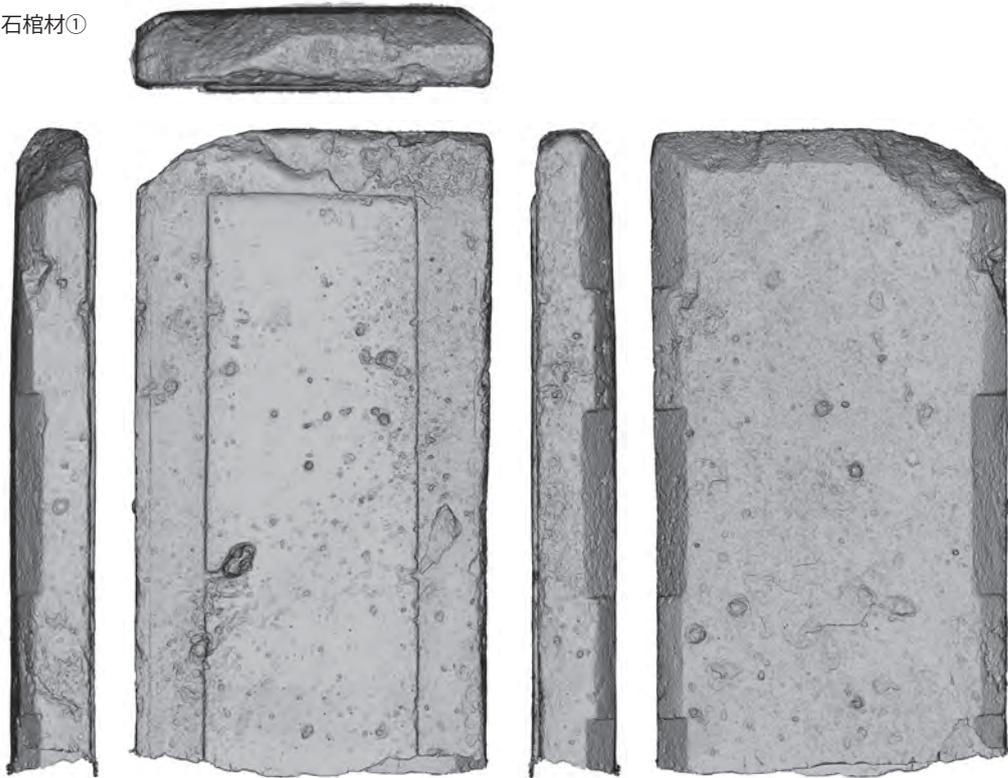
規模は長さ 1.21 m、幅 1.12 m、厚み 0.18 m である。内面には長側辺に幅 7 cm の溝が彫られており、長側石と結合する工夫がされている。短側辺には段や溝の痕跡はない。このような長側辺に溝を彫る加工は他の竜山石製組合式家形石棺の底石に類例が多く、底石であると考えられる。長側辺の溝が片方の短側辺まで続いており、2 枚継ぎの構造であったことが想定できる。石材は宝殿石系である。風化や破損が激しく、工具痕を残す部分はみられない。

### 4. 石棺材についての検討

#### (1) 石棺材②の工具痕

先述したように、石棺材②は内面、側面と外面で加工痕跡の精粗に大きな差が見られる。

石棺材①



石棺材②

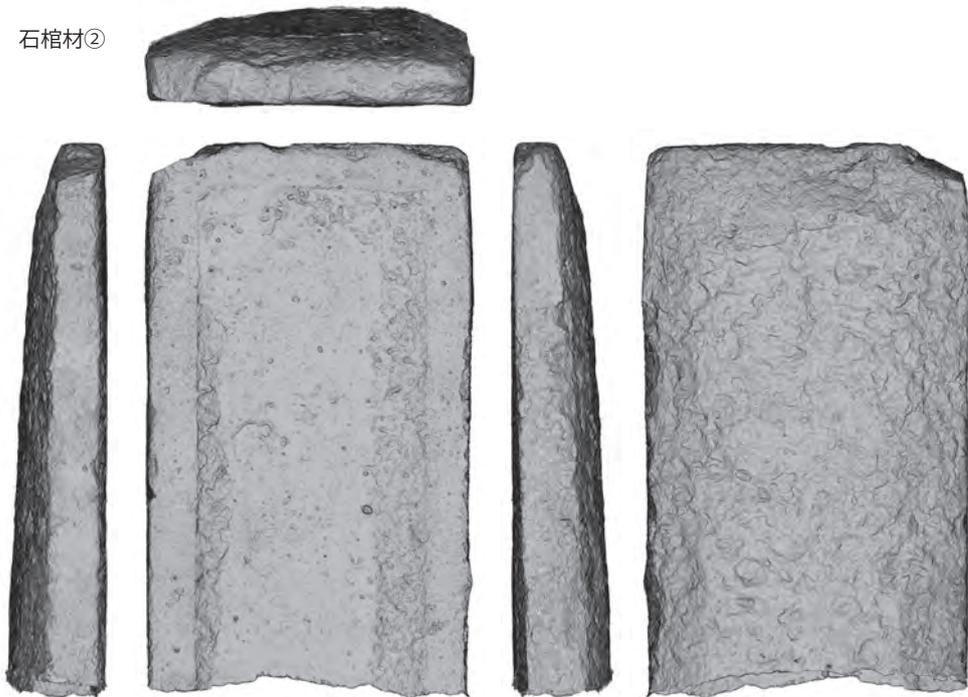


図3 石棺材①・②オルソ展開図 (S=1/20、3Dモデルは SfM/MVS により作成)

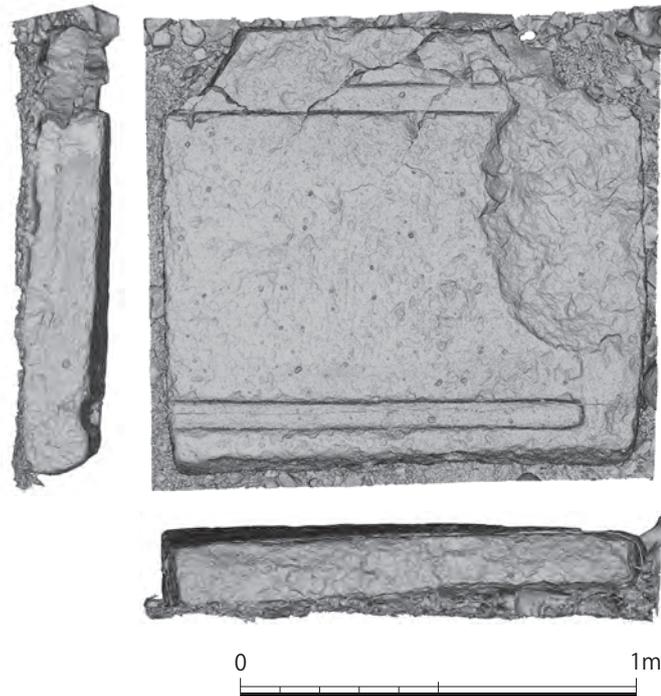


図4 石棺材③オルソ展開図 (S=1/20、3Dモデルは SfM/MVS により作成)

内面、側面は非常に平滑に整えられている。風化を受けており表面がなだらかになっている部分が多いが、部分的に径1 cm前後の細かな円形の凹凸を見ることができる。この内面、側面の一部に残る細かな加工痕跡は、先端がとがった工具による細かな敲打による加工痕跡と考えられ、古墳時代の石材加工技術について体系的な研究をおこなった和田晴吾の分類と比較すると、ノミ小叩き技法による痕跡と対応する<sup>7)</sup>(和田 1983・1991)。一方の外表面は内面に比べて非常に粗い工具痕が残る。特に外面の周辺部分に平面くの字状、または半円状で段差をもつ痕跡が確認される。これらはすべて外側に向かって開くため、外側から打撃を加えられた痕跡と考えられる。この外面に残る痕跡は、石材採掘時の工具痕である可能性が指摘できる。古墳時代の竜山石の採掘方法は、石切場に残る石材採掘の痕跡から、ノミヤツルハシ状の工具で必要とする岩塊周囲の軟質な部位を削り取りながら、最後に岩盤につながる部分に棒状の物を差し込み、起こし取る方法が推測されている(図5)(藤原 2005a)。外面が中央部の高い弧を描くような形態であることも、石材採掘時の形状を残すと理解できる。石棺の加工に関しては、埋納時に視認されにくい、もしくはされない部分の加工がその他の部分より粗くなる例が指摘されており(田邊 2008)、石棺材②の外面も視認されないために最終加工が施されなかった可能性が高い。

以上から、石棺材②は通常観察することの難しい石棺の底部分を確認でき、古墳時代の竜山石の石材採掘の痕跡をみることができるといえる点で貴重である。

#### (2) 勝堂古墳群における竜山石製石棺の使用状況

石棺材①、②はどちらも一部土中に埋まっているため長さを比較することはできないが、幅を比較してみると石棺材①は0.93 m、②は0.85 mと近い値である。また側石と結合する段や溝の幅を見てみると、石棺材①の溝は幅14.7 cm、②の段は幅12.5 cmである。また周囲

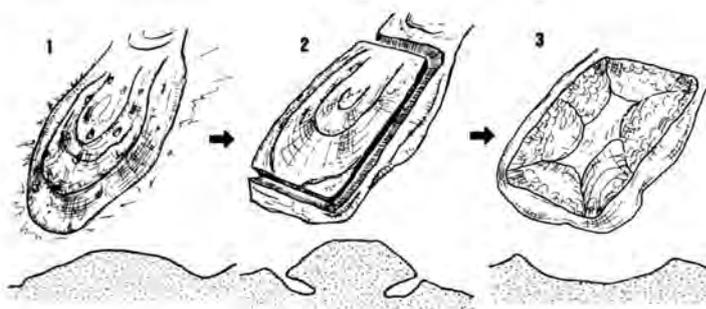


図5 竜山石採掘方法の模式図（藤原 2005a）

の溝や段の内側に凸状に残された部分、すなわち棺内面となる部分の幅は石棺材①で 54.8cm、②で 58.2cmを測る。これらがすべて近い値をとることを考えれば、石棺材①と②はもともと同一の棺を構成する蓋石と底石であった可能性が高い。

組合式家形石棺ということもあり、縄掛突起や上部平坦面指数のみから年代を決定することには注意が必要であるが、石棺材①は上部平坦面指数が 80 という非常に大きな値を示し、縄掛突起が衰退した様相を示すことから、7 世紀初め以降の資料であることはほぼ間違いのない。帰属古墳の候補としては横穴式石室の構造などから 7 世紀代と想定されるおから山古墳、赤塚古墳、弁天塚古墳などが挙げられるが、確定することは難しい。ただし瑞正寺の石棺材③の存在から別個体の竜山石製石棺が使用されたことは明らかであり、少なくとも 2 基の竜山石製家形石棺が使用されたことが確実である。また今回の調査では確認できていないが、骨塚古墳に隣接する天日神社についても竜山石かは不明だが、石棺材かと思われる凝灰岩片の存在が報告されている（細川 2007、東近江市教育委員会埋蔵文化財センター 2011）。石棺材①、②と石棺材③が同一の古墳におさめられたのか、異なる古墳におさめられたのかをつきとめることは難しいが、複数の竜山石製家形石棺を入手、使用できたことは、勝堂古墳群の被葬者となった当地域の首長層の勢力や性格を考える上で重要である。（藤川）

## 5. 交通からみた勝堂古墳群の意義

今回の正眼寺および瑞正寺の石棺に対する検討から、組合式家形石棺が勝堂古墳群に少なくとも 2 基あったことが導かれ、ともに竜山石と総称される播磨の石材のなかでも「宝殿石」と呼ばれる沿岸部の石材が用いられたと推測できた。竜山石製の家形石棺は播磨地域に多く分布するほか畿内地域にも多くもたらされており、さらに西は山口県まで東は滋賀県にかけて分布している。本例はその滋賀県内の例であり、分布の東限を構成しており、石棺の供給関係を考えるうえで重要な位置を占めている。

畿内においては竜山石に限らず家形石棺は有力な首長層によって用いられたことが明らかになっており、この勝堂古墳群もその例に漏れない。埋葬施設が明らかな行者塚古墳（玄室長 5.9 m、幅 2.0 m）や赤塚古墳（玄室長 4.0 m、幅 2.3 m）は大型の横穴式石室を内包することが判明し、首長層の奥津城として形成された後・終末期の古墳群であると言える。のちに愛知郡に属することから、当郡の有力豪族、依智秦氏を被葬者とする意見が古くから知られている。実際、近くの畑田廃寺からは「秦」の習書木簡も出土しており、この考えを補強してい

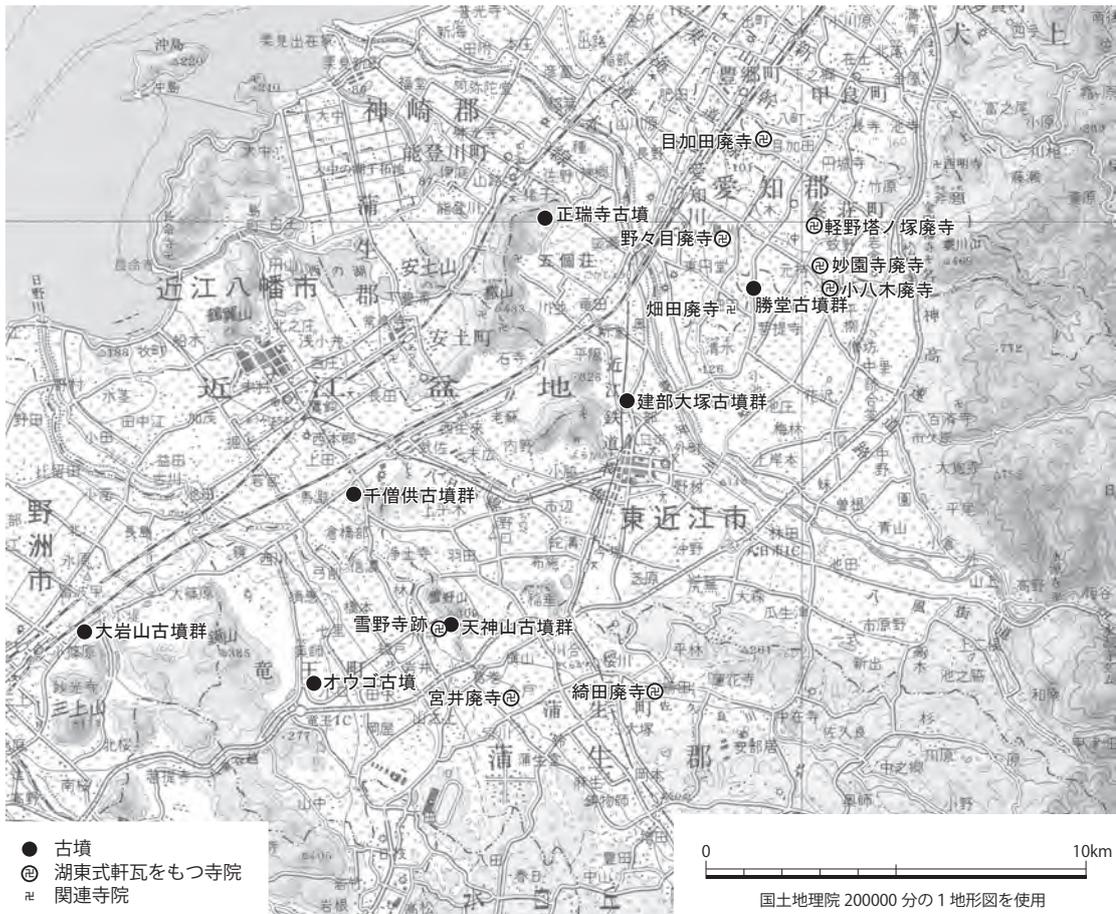


図6 勝堂古墳群と関連遺跡 (S=1/200000)

る。竜山石製家形石棺の入手も、首長層の交流によって達成されたと考えられる。

そもそも、後・終末期の大型横穴式石室をもつ古墳が交通路に沿って分布することが指摘されており、首長層の交通への関与が想定されている（広瀬 2013、菱田 2020）。近江地域においても野洲市の大岩山古墳群の甲山古墳（玄室長 6.6 m、幅 2.7 m）や円山古墳（玄室長 4.2 m、幅 2.3 m）が東山道に沿って立地し、官道整備以前の交通路の存在を裏付けている。隣接する近江八幡市では、千僧供古墳群中に大型の横穴式石室をもつ岩塚古墳（全長約 11 m、玄室幅約 2 m）が知られている。東近江市内では正瑞寺古墳（玄室長 4.7 m、幅 2.6 m）のようにこの交通路との関係が考えられる大型横穴式石室墳もあるが、勝堂古墳群は東山道からやや距離もあり、別の要因を考える必要がある。

ここで、古墳築造後に造営される古代寺院に目を向けると、勝堂古墳群の周辺では湖東式軒瓦<sup>8)</sup>が用いられる寺院が多いことがわかる。この湖東式は、愛知郡と蒲生郡に分布するが、東山道沿いにはなく、南方の内陸部にあり、これらをつなぐルートは東山道とは別に想定することが可能になる。その寺院の一つである雪野寺跡については、寺域南限に沿う道について、「かつて奈良路と呼ばれた」とされ、雪野山の鞍部を越えて八日市方面に抜ける交通路として紹介されている（丸山 1987）。この雪野寺跡に隣接して大型横穴式石室を内包する天神山 5 号墳（玄室長 5.0 m、幅約 2.1 m）が所在し、峠を越えた雪野山東南麓にも大型横穴式石室墳

をまじえる平石古墳群がある。また、雪野寺跡の西では、7世紀前半の方墳であるオウゴ古墳（玄室長 5.7 m、幅 2.1 m）やそれに先行する前方後円墳の薬師岩屋古墳（玄室長 5.4 m、幅 2.5 m）が所在し、雪野寺跡からこれらの古墳に至る「奈良道」が丸山竜平によって推定されている（丸山 1992）。ここより先については不明であるが、竜王町西部の丘陵を越えた先に、湖南最大の横穴式石室をもつ正福寺塚山古墳（玄室長 5.0 m、幅 2.6 m）があり、奈良方面に向かうルートを考えるヒントとなろう。

勝堂古墳群を貫いて通る県道 13 号線を南西にたどり、愛知川を渡った東近江市建部にはやはり後期の首長墳が存在する。建部大塚古墳は玄室長が 5.7 m 以上に復元でき、幅も 2.3 m を測る。近くにある大塚庵古墳とともに建部大塚古墳群を形成し、さらに「伊野王塚」という前方後円墳もかつて存在していた（丸山 1983）。この場所を中継すると先に竜王町で想定できた「奈良道」を延長して愛知郡方面に接続することが可能となる。湖東式軒瓦の分布が暗示するように、東山道とは別に東西をつなぐ幹線交通路の存在を推測することができ、後・終末期の首長墳がこの交通路を意識して造営されているとみてよいだろう。

広島県福山市の二子塚古墳、三原市の貞丸 1 号墳、山口県の大日古墳など、遠隔地にもたらされた竜山石製家形石棺をもつ古墳（亀山 2010）は、交通の要衝に設けられた大型横穴式石室墳であり、首長層の交通機能を雄弁に物語っている。勝堂古墳群もこうした例と同じく、官道付設以前の交通路に関わって営まれたと推測することが可能になってきた。この交通機能については、首長層そのものの交通と、交通に対する供給機能の双方を考える必要があり、前者の検討には棺や副葬品からのアプローチが有効であり、後者には交通路に対する古墳の立地が重要な役割をもつ。こうした検討にとって勝堂古墳群が重要な位置を占めていることは疑いない。（菱田哲郎）

## 6. おわりに

以上、石棺材①～③の調査成果を報告するとともに、交通からみた勝堂古墳群の意義について考察をおこなった。勝堂古墳群では発掘調査による出土資料が乏しく、石棺材①～③は勝堂古墳群を評価する上で非常に重要な資料としてこれまでしばしば言及されてきたが、その基礎情報には多少の混乱が生じていた。本報告と昨年度報告で、石棺材の移動に関する経緯や時期に一定の見通しを立てることができ、形態や石材、工具痕などの基本的なデータを提示することを達成できた。さらには大型横穴式石室墳や湖東式軒瓦を用いた古代寺院に焦点を当てることで、東山道とは別の東西をつなぐ官道付設以前の幹線道路の存在が推測され、その検討に勝堂古墳群が重要な位置を占めることが示された。これまで竜山石製石棺が畿内とのかかわりの中で入手されたことは指摘されてきたが、より具体的に議論するうえで有意義な視点が提供されたと言える。このような今回の成果が、今後の勝堂古墳群にかかわる研究の進展に寄与することを期待する。

また今回の調査では三次元計測を導入した。作成した 3D データは様々なニーズに対応することが可能である。勝堂古墳群では、古墳群の文化財的価値を地域の方々に認識してもらうための取り組みが課題としてあげられている（藤川ほか 2022）。今回取得した 3D データがこうした取り組みに利用され、勝堂古墳群の保存と活用に貢献することを願っている。（藤川）

## 謝辞

追加調査において、東近江市勝堂町の廣田茂氏、廣田元良氏、東近江市文化スポーツ部の嶋田直人氏にはたいへんお世話になった。記して感謝したい。

## 註

- 1) 2022年12月11日、正眼寺境内にて廣田茂氏、廣田元良氏にご教示いただいた。
- 2) ただし、『近江愛智郡志』には赤塚古墳の羨道の石材を瑞正寺の鐘堂石垣と忠魂碑建設地の石垣用に搬出したという記述もみられるため（滋賀県愛智郡教育会 1929）、石棺材が同時に運ばれた可能性も考えられる。
- 3) 上部平坦面指数は、上部平坦面幅 / 棺蓋幅 × 100 で算出している。
- 4) 石棺材の部分名称として、側石と結合するための段や溝などの加工が施されている面を内面、その反対側を外面と呼称する。
- 5) 先山徹は岩相の観察とともに帯磁率を測定することによって、竜山石が現在の兵庫県高砂市から加古川市にかけて、加西市長付近、高室付近などの産出地によって異なった特性があることを明らかにしている（先山 2005）。そして先山の分析をもとに藤原清尚が、高砂市から加古川市付近にて採石される火山礫凝灰岩、結晶ガラス質凝灰岩を宝殿石系、加西市長付近にて採石される凝灰角礫岩、結晶質凝灰岩を長石系、加西市高室付近にて採石される細粒凝灰岩、凝灰質砂岩を高室石系に細分する案を提示している（藤原 2005b）。
- 6) このような蜂の巣状の風化と同様の事例は、狭山池石棺群など竜山石製石棺で数例報告されている（奥田ほか 2018）。
- 7) 和田晴吾は石材加工の段階を、山取り、粗作り、仕上げの三段階に分けた上で、仕上げの段階でみられるものとして、主に硬質石材を対象に先端が尖った工具で細かく叩く「ノミ小叩き技法」、軟質石材を対象として刃のある工具で浅い匙面をなすように削る「チョウナ削り技法」、当初は軟質石材、後には硬質石材をも対象として刃のある工具によって叩く「チョウナ叩き技法」をあげる。なお、これらを終えた上に施す「みがき技法」の存在も指摘されている。石棺材①、②には非常に平滑で加工痕跡の残らない部分も見られるため、「みがき技法」の施されている可能性も否定できないが、風化との区別が難しいため言及しない。
- 8) 湖東式軒丸瓦は中房中心の大型蓮珠と外区内縁の珠文帯によって特色づけられる瓦で、押捺文を施す軒平瓦と組み合う。ここではそのどちらかが出ている寺院を表示した。

## 参考文献

- 愛知川町史編纂委員会 2005 『近江愛知川町の歴史』第1巻（古代・中世編） 愛知川町
- 奥田尚・西川寿勝・加藤治樹 2018 「狭山池中樋等出土石材の石種と産地」『大阪府立狭山池博物館研究報告』  
9 大阪府立狭山池博物館
- 亀山行雄 2010 「家形石棺集成 山陽」『日本考古学協会 2010 年度兵庫大会研究発表資料集』日本考古学協会 2010 年度兵庫大会実行委員会
- 先山徹 2005 「岩石と定義」『竜山石切場—竜山採石遺跡詳細分布調査報告書』高砂市教育委員会
- 滋賀県愛智郡教育会 1929 『近江愛智郡志』巻一 滋賀県愛智郡教育会

- 滋賀県教育委員会 1979 『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書VI - 4』 滋賀県教育委員会
- 下中弘 1991 『日本歴史地名大系』 第二五巻（滋賀県の地名） 平凡社
- 田邊明宏 2008 「越前笏谷石製石棺の埋葬形態の復原」『吾々の考古学』 和田晴吾先生還暦記念刊行会
- 秦荘町史編纂委員会 2005 『秦荘の歴史』 第一巻（古代・中世） 秦荘町
- 東近江市教育委員会埋蔵文化財センター 2011 「東近江市の遺跡シリーズ4 勝堂古墳群」 東近江市教育委員会埋蔵文化財センター
- 菱田哲郎 2020 「大型横穴式石室と交通」『横穴式石室の研究』 同成社
- 広瀬和雄 2013 「終末期古墳の歴史的意義」『国立歴史民俗博物館研究報告』 179 集 国立歴史民俗博物館
- 藤川聖起・横白彩江・大倉響稀 2022 「東近江市勝堂古墳群の再検討（1）」『京都府立大学歴史学科フィールド調査集報』 第8号 京都府立大学文学部歴史学科
- 藤原清尚 2005a 「竜山石切場の形態とその石材のとり方」『竜山石切場－竜山採石遺跡詳細分布調査報告書』 高砂市教育委員会
- 藤原清尚 2005b 「加古川下流域の古墳石材「竜山石」をみる」『龍谷大学考古学論集 I』 龍谷大学考古学論集刊行会
- 細川修平 2003 「近江における後期群集墳造営の契機」『近江地方史研究』 35 巻
- 細川修平 2007 「勝堂古墳群の造営」『近江文化財論叢』 第二輯 近江文化財論叢刊行会
- 細川修平 2010 「家形石棺集成 滋賀県」『日本考古学協会 2010 年度兵庫大会研究発表資料集』 日本考古学協会 2010 年度兵庫大会実行委員会
- 丸山竜平 1983 「古代のあけぼの」『八日市市史』 第一巻 八日市市役所
- 丸山竜平 1987 「原始・古代の竜王町」『竜王町史』 上巻 滋賀県竜王町役場
- 丸山竜平 1992 「日野川中流域の白鳳寺院と古墳」『塑像出土古代寺院の総合的研究』 京都大学文学部考古学研究室
- 横田英男 1979 『湖東町史』 上巻 湖東町役場
- 和田晴吾 1976 「畿内の家形石棺」『史林』 59-3 史学研究会
- 和田晴吾 1983 「古墳時代の石工とその技術」『北陸の考古学』 石川考古学研究会
- 和田晴吾 1991 「8 石工技術」『古墳時代の研究』 第5巻（生産と流通Ⅱ） 雄山閣

#### 編集後記

フィールド集報は、刊行当初より Adobe 社の InDesign を利用して組版作業を手作りでおこなっている。InDesign の取り扱いは、歴史学科文化遺産学コースのうち、考古・建築・地理の実習メニューに含まれ、本書の一部については、そうした実習のなかで学生が組んだものとなっている。

今年度のフィールド調査においても、各地で多くの方からのご理解とご協力を賜った。ここに改めてお礼申し上げる。歴史や文化遺産にかかる調査は一人では決して成しえないということを、今後も常に意識するように努めたい。(う)

---

京都府立大学文学部歴史学科

## フィールド調査集報 第9号

編集・発行 京都府立大学文学部歴史学科

〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5

発行日 2023年3月30日

印刷 株式会社 北斗プリント社

〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町 38-2

---